

ひので映画大使最新版

第24回映画大使「聯合艦隊司令長官 山本五十六 - 太平洋戦争70年目の真実 -」

期 日 平成23年12月23日(金)
 場 所 ワーナー・マイカル・シネマズ日の出

【ストーリー紹介】

1939年(昭和)14年夏。アメリカとの戦争回避の為、命を賭して「日独伊三国同盟」に反対した山本五十六たちであったが、その後ついに同盟は締結され、日本海軍によるハワイ真珠湾攻撃が決行された。その作戦を立案し指揮を執った山本五十六。開戦に反対し続けた彼が何故その火ぶたをきったのか…そこには彼の確固たる想いがあった。



(C)2011 「山本五十六」製作委員会

映画大使の「感動と感想」をお伝えします。

このコーナーは、映画を見た感想や感動を、ストーリーは伏せて「みなさん」に紹介するコーナーです。



今回、参加された映画大使の皆さんです！

▶ 映画大使の「第一声！」

聯合艦隊司令長官・山本五十六にスポットを当てた作品！

平和を願った山本五十六の苦渋の想いが伝わった

役所広司さんら、キャスト陣が豪華で素晴らしかった

▶ 映画大使の「映画のツボ！」

Aさん

私も生まれが五十六と同じ長岡で、人物像も色々なところで触れて知っていました。是非観たいと思っていた作品なので、観られてよかったです。そして今だからこそ、この映画なのかと思いました。五十六は、2年間ほどアメリカに武官として滞在しており、アメリカには太刀打ち出来ない事も既に分かっていた。そういった点では客観的情報で先を見られる人、そういう人が、今の時代、特に日本には必要だと感じました。また、メディア批判・重要性を訴えていて、今の時代もメディアの言っている事が本当か嘘かわからず、また危険性がありますが、そういった事も訴えていたのではないのでしょうか。五十六のような人がこれからの日本を引っ張って欲しいと感じました。

Bさん

映画を観て感じた事は、マスコミはすごく怖いという事です。今の世も皆マスコミに流されていて、マスコミが先導して人々を動かしている危うさを感じています。日本の政府・政治家に信頼がない中、劇中の山本五十六のような政治家が出てきて欲しいと痛切に感じました。悲惨な結果しか生まない戦争は絶対にやってはいけないという事を、子供や孫に伝えていきたいと感じました。

Cさん

私の父親が戦争体験者で、この映画を観たいと思っておりました。司令長官になるくらいの人なので、もっと戦争など攻めていくような感じの人という印象がありましたが、今回の作品を見たら、そうではなく、逆に講和に持っていく考えが意外でし

た。戦争映画なのに戦闘シーンが少なく外国の方も出てなくて、五十六の人間像を描いた映画だと思いました。五十六が大事にしていたのは、講和の心と、'見て学べ' というような人材育成であったと思います。そのような人であったからこそ、司令長官になれたのでしょうね。

Dさん

戦争というテーマで難しかったですが、心情では反対と思いながらも、実行をせざるを得なかった五十六の苦悩も描かれており、その意味で戦争というのは難解だと思いました。途中の女将のセリフ(戦争が起きれば多くの人が犠牲になる)が皆の想いを代弁しているように感じました。戦争は絶対に起こしてはいけないと皆が思い、新しい時代を築いていかなければならないと思いました。

Eさん

この映画を観て、'勝っても人は死ぬ'ということがよく分かりました。私が聞いた言葉に'よく教え、やって、やらせて褒めてやる'というのがあります。口で説明し、やって見せて、やらせて、下手でも褒めてやること。私も子育てに活用しました。どんな小さなことでも成果があったら褒めてあげる。五十六もそういう考えの人であるので、軍人として尊敬できるかは別として、教育者としては活用できる所がある人だと思いました。

Fさん

映画を観ていて、メディアコントロールや、官僚支配など、70年前とあまり変わっていないと感じました。作品中の五十六の人物像は、いかめしい感じではなく、むしろ飄々(ひょうひょう)としていて、少し肩すかしを食った感じです。今までの五十六とは描き方が違って良いと思いました。開戦には反対していた事、いざ開戦すれば軍人として、勝つ為に全力を注ぐ所など、優れた軍人という面が描かれていましたね。ストーリー的には、戦争の是非よりも山本五十六の人となりや考え方、生き方が前面に出て良かったと思います。戦争のシーンではCGをあまり感じさせない作りでした。特撮監督が頑張っているなと感じましたね。エンターテインメントとしても良い映画だったと思います。

Gさん

今までの戦争映画と違って、派手な戦闘シーンが少なく、五十六の人間性がよく描かれていて、彼の穏やかさが周りの人間の気持ちを楽にする潤滑油のようになっていたのがわかりました。五十六のような大人が、今の世の中に沢山いたら、子供達の成長の面など、もっと日本が違った国になるんだろうなと思いました。彼の人間的な温かさをとても感じました。小椋桂さんの主題歌も耳に残って良い曲でした。観たいと思っていた映画だったので良かったです。

▶ 作品の内容 (印象に残ったシーンなど)

- ・食事のシーンの時、一匹の魚を五十六が家族に分けていましたが、戦争が始まった時に妻が出した鯛を、五十六が家族に分ける事がなかったですね。家族も何も言わなかった。これは和平を願っている表れで(開戦は祝い事ではない)、深い意味があると思いました。
- ・一般市民が開戦を願っていたように見えました。あの時代だからかもしれないですが、情報が入らないまま、戦争の怖さとか全く無いかのごとく、本当に無邪気にしていたのが信じられなかったです。
- ・それまで日本は敗戦した事がなかったのも影響していたと思います(今回も負ける筈がない)。
- ・苦しい事や厳しいと思った事も言えなかったのでしょうか。そういう事を言うと非国民になってしまう時代だった。
- ・「風と共に去りぬ」という映画は、戦争中に作っていた。アメリカが、いかに凄いかが分かります。そういう事を分かっていた庶民がいたかどうか・・・
- ・映画でも描かれていましたが、真珠湾の時の熱狂ぶりを見ると、あの当時の民衆は開戦を望んでいたのでしょうか。被害者というわけでもないし、メディアコントロールもあったかもしれませんが、その時代の空気としては開戦を望んでいましたよね。提灯行列のシーンに強調されていました。
- ・あの当時の日本と同じような国が世界にはまだいくつもありますよね。逆に日本みたいに色々な情報が流れていて、その中でどれを選択するかが難しい。メディアって怖いなと思います。
- ・真珠湾攻撃の時、山本五十六は講和を望んでいる事を、新聞は記事にしませんでした。それを軍の意思として書く事をメディアとしてはしなかった。メディアが民衆を煽っていたんですね。
- ・でも真実を書きたくても、圧力で記事が書けなかったと聞いた事があります。全部が全部同じ考えではなかったのも事実だと思います。

▶ まとめ

あくまでも戦争の早期講和の実現を願った司令長官・山本五十六の人間性を、今までの戦争映画とは違った趣で描いた作品でした。戦争という状況下の中でも、その信念を失う事なく、民の事を考えた彼が今の日本を見たらどう思うのでしょうか。戦争がないだけが本当の意味での平和ではないと思います。

[➔ 関連ページ: これまでのひので映画大使](#)

[➔ 関連ページ: ひので映画大使のトップに戻る](#)

問合わせ先: 教育委員会文化スポーツ課社会教育係
電話042-597-0511(内線544)

[◀ 前のページへ戻る](#) | [ページトップへ](#) ▶

〒190-0192 東京都西多摩郡日の出町平井2780番地 電話 042-597-0511(代表)
Copyright © 2011 Hinode Town All Rights Reserved.

[サイトマップ](#) | [このサイトについて](#)